

ローマ人への手紙13章 「キリスト者の社会生活」

1A 国に従う 1-7

1B 神からの権威 1-2

2B 悪に対する制裁 3-5

3B 納税の義務 6-7

2A 隣人を愛する 8-10

3A 闇の業を脱ぎ捨てる 11-14

1B 近づいている救い 11-12

2B キリストを身に着ける 13-14

本文

私たちの聖書通読の学びは、ローマ 13 章に入ります。前回、私たちは、神の憐れみによって、自分のからだを、生けたささげ物として献げなさい、ということ。それから、この世と調子を合わせず、思いを新たにすることによって、自分を変えていただき、神のみこころを見分けることを見ました。そして、初めにパウロが語ったのが、教会生活です。思い上がることなく、慎み深く考え、それぞれ異なる賜物が与えられているのだから、主に熱心に仕えます。そして、兄弟愛を抱いて、互いに相手を優れたものとみなし、心ひとつにしなさいという勧めをパウロは行っていました。つまり、教会生活の奉仕と関係についての勧めを行いました。

そして、パウロは教会内から教会外の話にも触れ始めていました。悪に対して悪で報いず、善で報いなさいということです。復讐は神のすることであり、自分たちに対して行われた悪は、神が必ず報いてくださいます。

1A 国に従う 1-7

そこでパウロは、だからといって、悪に対して、この地上において制裁がない、罰がないということではないことを話しています。1-2 節を見てください。

1B 神からの権威 1-2

¹ 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。² したがって、権威に反抗する者は、神の定めに従うのです。従う者は自分の身にさばきを招きません。

主は、ご自分が戻って来られる時に、これまでの悪や不正に対して完全な裁きを行ってください。そして、キリストを王とする神の国においては、正義と平和が地上に満ちます。けれども、そ

れまでの間、神はご自分の憐れみによって、人の行った悪に対して悪で報いる権威を人に与えることによって、悪がはびこるのを抑えるようにしてくださいました。人々の思いが悪に傾いて、それで水によって地上に裁きを神が下された、ノアの時代のことを思い出してください。そもそも、悪がはびこったのは、カインがアベルを殺した殺人から始まっているので、神はノアにこう命じられたのです。「創 9:5-6 わたしは、あなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。いかなる獣にも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。6 人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。」これが、政府の始まりと言ってもいいです。神が、命を取る者に対して命を取る権威を、人に与えられました。政府、国には本質的に、悪を行った者に対して剣をもって制する力を神によって与えられたということなのです。それが、パウロがここで言っている、「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられているからです。」ということです。

私たちはこれから、13 章において、キリスト者の社会生活、あるいは社会的責任について見ていきます。12 章は教会が中心でしたが、そこから社会の中でどう生きていくべきかの指針を、パウロがここで与えています。

国には、悪に対して悪で報いる権威が神によって与えられているという真理は、今のキリスト者にとってとても大切です。「悪に対して善で報いなさい」という教えはたくさん受けているクリスチャンたちが、法や警察の力に訴えることさえためらうことが、しばしばあるからです。家庭内暴力、いわゆる DV において、暴力を受けているキリスト者の女性のほうが、自分が耐え忍びさえすればいいということで、耐え忍んでしまうのです。しかし、本当に夫を愛しているならば、夫が変わってほしいと願うならば、彼に力を示すことのできる警察に通報しなければいけません。それは悪に対して悪で報いることではありません。むしろ、この悪をやめさせるきっかけになり、彼自身が更生の道を歩むことができるかもしれないからです。

私たちの個人生活において、悪に対して善で報いる、自分で復讐しないという教えがある一方で、主は上に、悪を制するための権威を与えてくださっています。これは神の憐れみであり、もちろん人の権威ですから、不完全であり、人の権威でさえ腐敗をし、悪を行うようになります。それは、ダニエル書を見れば分かりますが、世界の帝国の姿が獣として幻の中で現れ、それぞれ横暴な姿を見せています。それであっても、権威が上にあるということによって、私たちの社会には秩序が与えられていて、その平和の中で、私たちが慎む深く生きることができているのです。

パウロは、テモテへの第一の手紙でも、このことを教えています。上に立つ権威のために祈りなさいと教えています。そして大事なものは、上に立つ権威のために祈り、執り成し、願う、そういった祈りが、結局は、福音宣教につながるのだということです。「I テモ 2:1-5 そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とり

なし、感謝をささげなさい。2 それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。3 そのような祈りは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることです。4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。」私たちの教会の祈り会では、必ず、日本政府のために祈っています。今は、菅義偉首相のために祈っています。そのことによって、日本社会の中で私たちが、敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送ることができること。そして、その平和の中で、私たちの神の救いが、イエス・キリストによってもたらされる、ということです。

ここで、私たちは、その指導者や権威の座に着いている人の好き嫌いは、関係ないのだということを知らないといけません。当時のローマ時代のイスラエルでは、ユダヤ人たちに不満が溜まっていた。彼らに対して酷い仕打ちをするローマ、重税で苦しませていることで、それで彼らの叫びが絶頂に達していて、メシアを求めていたのです。メシアは彼らにとっては、ローマを倒す軍事的な救世主の存在になっていました。それで、イエス様がエルサレムに向かう時に、ローマを倒してくれるという期待を、ユダヤ人たちは抱いていたのです。今、パウロは、コリントからローマにいる信徒たちに手紙を書いています。コリントで、アキラとプリスキラに会いましたが、二人は、「使18:2b クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。」とあります。後にユダヤ人たちはローマに戻ることはできましたが、それでも、ローマとユダヤ人の間には緊張感が漂っていたことと思います。

そして時の皇帝は、ネロでした。この時のネロはまだ善政を行っていたと言われていますが、ローマで大火が起こってからは気が狂ったようになって、最後にこのネロによってパウロ自身が死刑判決を受け、使徒ペテロも死刑にされます。それでも、パウロは権威に従いなさい、またペテロも王を敬え、と第一ペテロの中で話しているのです。

従うということ、敬うということが、キリスト者のあるべき姿勢なのです。他の、使徒たちの手紙にもそれは一貫しています。妻は夫に対して、主にあつて従いなさい。子は親に従いなさい。しもべは、主人に従いなさい。そして主を恐れて、互いに従い合いなさいとあります。なぜ、ここまで言われるのか？それは、私たちの主ご自身が、神であられたのに、固執せず、人の姿を取って、しかも、十字架の死に至るまでご自身を従わせたのです。思い出してください、イエス様ご自身が、ご自身に十字架刑を処するピラトに対して、こう言われました。「ヨハ 19:10-11 そこで、ピラトはイエスに言った。「私に話さないのか。私にはあなたを釈放する権威があり、十字架につける権威もあることを、知らないのか。」¹¹ イエスは答えられた。「上から与えられていなければ、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。」¹²」イエス様は、ピラトに十字架にご自身を付ける権威が、上から与えられていると言われました。したがって、主は従われたのです。

ここで、私たちは「この世に調子を合わせず、思いを新たにすることによって、自分を変えていただく。」ことが必要ですね。どうしても権利を行使することによって、物事は変わってしまう。これは世の考え方です。いいえ、私たちが自分自身を、相手を敬っていくことによって、主ご自身が私たちを通して現れてくださり、主ご自身の権威と力が人々を変えてくださるからです。

これを見ることができるのが、ダニエルの生涯です。今、私たちは平日の学びでダニエル書を見えています。彼と三人の友人は、バビロンの王に仕えるための養成訓練を受けました。バビロンのことばや文学を徹底的に教え込まれ、名前までをバビロンの神々にちなんだ名前に変えられました。それでも、王の下で働いている人々を敬い、信頼関係を築いていたのです。バビロンの王、ネブカドネツアルは歴史に残る、横暴な、強大な王でありました。しかし、ダニエルは彼を敬い、彼に仕え、ついにネブカドネツアルは、まことの王、天の神をほめたたえるに至るのです。彼が自分の権利を振りかざしていたら、そうはならなかったでしょう。

ただし、ここで、すべてが神によって与えられている権威ですから、神の命令に違反するような命令を権威ある者が出した時には、それに従わないといけないのか？という、そうではありません。今、ダニエルの生涯を話しましたので、彼は、王の食べるごちそうや、ぶどう酒は、自分自身を汚すとみなす、つまり罪を犯すことになることと知り、これを食べないと心に決めました。けれども、自分を管理している、宦官の長には、十日間、野菜だけ食べるようにさせてくださいと言って、自分自身に、主に従うための試みを置いたのです。ダニエルの三人の友人は、ネブカドネツアルの造った金の像を拝みませんでした。後にダニエルは、メディアのダレイオス王に仕えていた時、王以外に祈ったり、願ったりする者は、獅子の穴に投げ込まれるという命令が出たことを知ってからも、いつもと同じように、エルサレムの方角に開いた窓のところで、イスラエルの神に祈りを献げたのです。

パウロが死刑にされたのも、ペテロが死刑にされたのも、イエスが主であるという信仰告白を捨てなかったからであり、主ご自身や主の命令を捨てるような命令を上への権威が下す時は、自分の良心に従います。しかし、恐れ敬いつつ、命令に背いたことによる責任を、自分自身で甘んじて受けることによって、その権威に従うのです。

2B 悪に対する制裁 3-5

³ 支配者を恐ろしいと思うのは、良い行いをするときではなく、悪を行うときです。権威を恐ろしいと思いたくなければ、善を行いなさい。そうすれば、権威から称賛されます。

私たちが以前いた宣教地に、愛してやまない親しい友人がいました。彼女は、日本に出稼ぎに来たことがありました。滞在期限が過ぎていたのに滞在していた、つまり不法滞在状態でありました。それで、お巡りさんに通りで見かけるたびに、怖くてしかたがなかったそうです。悪を行なっていれば、権威者は恐ろしい存在になってしまいます。けれども、法に従っていれば、何も恐れるこ

とはありません。むしろ、善良な市民ということで評価を受けることになります。

キリスト者の間には、しばしば信条に合わないということで、政府に反対する運動に積極的に関わっている人々がいます。政府が自分たちを弾圧する人々であるということを前提にして、反対します。しかし、政府が自分たちを弾圧する存在だと初めから決めつけていること自体が間違いです。政府は私たちの敵ではないのです。政府や警官などは、神のしもべなのです。私たちが善を行なってさえいけば、ほめられることはあっても、私たちが恐怖に陥れることはないのです。ダニエル書にもそのことはよく表れており、ダニエルたちにはネブカデネザル王を恐れている様子は何一つありませんでした。

⁴ 彼はあなたに益を与えるための、神のしもべなのです。しかし、もしあなたが悪を行うなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います。

彼らは日常的に、ローマ兵とその剣を見ていました。それは、人々を虐げる時にも用いられましたが、しかし、基本は秩序を保つためであります。剣が使われる時は、罪を犯している者に対して、また反逆者を制圧するためです。それが、「無意味に剣を帯びてはいない」の意味です。現代社会では、警官が拳銃を携帯しています。これをみなさんは恐れているでしょうか？ 恐れませんか、なぜなら、誰かに危害を与える者に対してのみ使用されることを知っているからです。

⁵ ですから、怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも従うべきです。

今、パウロは、彼らが「神のしもべ」であると言いました。主が戻って来られるまで、秩序を保つために、神から剣を渡された人々でありますから、神のしもべなのです。ですから、私たち神を信じる者は、恐ろしい存在ではなく、彼らを敬い、従うことによって、神を敬うのです。今度、警官を見たら、神に感謝してください。彼らは、神のしもべなのです。これらお巡りさんのおかげで、私たちは、道端を歩いている時に、恐れてびくびくすることなく、安心して歩くことができます。

3B 納税の義務 6-7

⁶ 同じ理由で、あなたがたは税金も納めるのです。彼らは神の公僕であり、その務めに専念しているのです。⁷ すべての人に対して義務を果たしなさい。税金を納めるべき人には税金を納め、関税を納めるべき人には関税を納め、恐れるべき人を恐れ、敬うべき人を敬いなさい。

国が存在する理由は、一つは社会の秩序ですね。もう一つは財産や生命を守ることです。国に財産がなければ、私たちの生活を保障する最低基準を満たすことはできません。そのために納税が必要です。ここでも、ローマ社会は、その重税によって強い不満を持っていました。ユダヤ人に

とっては、それは自分たちがローマに従属していることを示しているのです、屈辱的でもありました。けれども、それでもその納税によって、ローマには道路が整備されたり、水道路が延ばされたり、最低限の生活を営むことができていました。

それで、イエス様が十字架に付けられる最後の週に、宮の中で質問を受けました。「マタ 22:17-21 ですから、どう思われるか、お聞かせください。カエサルに税金を納めることは律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」¹⁸ イエスは彼らの悪意を見抜いて言われた。「なぜわたしを試すのですか、偽善者たち。¹⁹ 税として納めるお金を見せなさい。」そこで彼らはデナリ銀貨をイエスのもとに持って来た。²⁰ イエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像と銘ですか。」²¹ 彼らは「カエサルのです」と言った。そのときイエスは言われた。「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」

パリサイ人たちは、熱心党のように武力でローマに対抗しようとは思っていませんでしたが、ローマは異邦人の支配であり、これから解放されなければいけないと思っていました。そして、税を納めることは律法にかなっていないとみなしていました。けれども、よく考えてみてください。それほどローマに反対しているのであれば、きちんと一貫性をもって、ローマから受ける恩恵を受けるべきではありませんね。ローマによって整備された街道を使うべきではないし、水道も飲むべきではありませんね。ですから、これが律法にかなっているのかどうかという議論自体が、彼らが神の国に対して真剣ではないことの表れでした。

イエス様はそのことを見抜いて、「それなら、カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」と言われたのです。ローマからの税金というものは、そのまま納めなさい。あなたがたが目に留めなければいけないのは、神の国であって、そのために命をかけなさい、ということです。これが、私たちキリスト者が持っている姿勢です。税金や政治に関わること、社会的な責任は、その制度を立てておられるのは神なのだから、しっかりと果たします。それ以上のものではない。神の国は、この世のものではないのだから、この世のことで命をかける必要はない。神の国と神の義のために、命をかけなさいということです。

ですから、パウロがここで言っているように、納税を納めるのです。関税もそうだし、その他、支払うべき人には支払い、義務を果たしていくのです。けれども、きちんと運用されているのかわからない。むしろ、税金が濫用されている！と反感を持つかもしれません。某テレビ局の公共料金も、払いたくない！と言われるかもしれません。けれども、そのようなものは、神がなんとかしてくださるのです。カエサルのものはカエサルに返しなさい。そこには、神の国の本質はありません。

2A 隣人を愛する 8-10

そして、キリスト者としてもっと、命をかける分野があります。積極的に求めていき、これぞ神の

国なのだということを、社会に示さないといけません。それは、納税云々ではなく、「隣人を愛する」ということです。

⁸ だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことは別です。他の人を愛する者は、律法の要求を満たしているのです。

今、納税についてパウロは話していました。納税の義務がありますが、同じように、人に対しては返済の義務があります。借りた物は返すという義務です。「何の借りもあってはいけません。」というのは一切、借金をしてはいけませんということではないし、ローンを組んではいけないということではありません。むしろ、返済していきなさい、そして借りのあるような状況に留まっていることはやめなさい、ということです。箴言 22 章 7 節には、「借りる者は貸す者のしもべとなる。」とあります。そうした縛られた状態にいるのはよくないのです。

けれども、縛られていないといけないことがあります。負債があって、それは互いに愛し合うという負債です。この命令は、主から来たものであり、私たちはまずこの命令を守ることに心を使わないといけないということです。互いに愛し合うというのは、兄弟たちの間で行うものですね。信者たちの間では愛し合うということです。そして、パウロは、「他の人を愛する者は、律法の要求を満たしているのです。」と言っています。これは教会外の人々も含まれます。善を行っていく、良いことを行っていくなさいということです。こちらのことに集中します。

私たちキリスト者が、社会に関わることでこれは罪なのかどうか議論している暇があるならば、今、そこにいる人々に福音を届けること。また助けの手を差し伸べることが大切です。コロナ禍にあって、教会で、対面で礼拝すべきかどうかという議論がありましたが、そんなことよりも、いかにコロナ禍によって苦しんでいる人々に届くのか？ということに関心を持つべきですね。私たちが遣わされている教会、カルバリーチャペル・コスタメサでは、経済的に困窮している人々のために、食材の入っている段ボールを用意し、貰いに来る人々、一人ひとりにお祈りもするという働きをしていました。また、ある他のカルバリーチャペルの教会では、礼拝をすると罰金が科せられましたが、それも甘んじて受け、けれども、心が飢え渴いている人々が大勢、礼拝にやって来て、これまでにない数のパプテスマを受ける人々が起こされました。一方では、しばらくオンラインだけの礼拝にし、もう一方では対面礼拝を続けましたが、どちらが正しいかという議論が不毛です。要は、人々に福音をもって届いているのです。これこそが第一のことです。

⁹「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない」という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」ということばに要約されるからです。

このことは、イエス様が律法の専門家に対して答えられたことですね。「マタ 22:35-40 そして彼らのうちの一人、律法の専門家がイエスを試そうとして尋ねた。36 「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」37 イエスは彼に言われた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』38 これが、重要な第一の戒めです。39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」先ほど、法律のことについて見てきました。国の定める法律があり、私たちはそれを守ることは、神に従うことだとしました。けれども、キリスト者にとって、殺してはならないとか、盗んではならないとか、姦淫してはならないとか、そういった一つ一つの戒めを守ることに以上、もっと上位の戒めと言ったらよいでしょうか、「隣人を自分自身のように愛する」ということをやっていれば、姦淫をすることも、盗むことも、殺すことも、貪ることも、当然しないわけです。

¹⁰ 愛は隣人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです。

良いことを行うことで、悪をもちろん避けることができます。イエス様が言われた言葉と同じですね、「マタ 7:12 ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。」してほしくないことをしない、ではなく、してもらいたいことを他の人にする。これが律法と預言者とイエス様はまとめておられて、それが、ここではパウロは「愛は律法の要求を満たす」と言っています。

3A 闇の業を脱ぎ捨てる 11-14

そして、もう一つパウロは、この社会に生きていて、集中すべきことをもう一つ語ります。

1B 近づいている救い 11-12

¹¹ さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いをもっと私たちに近づいているのですから。

午前礼拝でこの箇所からお話ししましたので、ぜひお聞きください。ここでは、13 章全体の流れからご説明しています。私たちの社会生活は、国の定めた法律に従う。納税も行う、ということがあります。これらは、みこころにかなったことで神がお立てになった制度です。けれども、それは全く主体ではありません。隣人を愛すること、善を行っていくことが、教会にとって大きな目的だということですが。

そして、もう一つは、「救い近づいているので、眠りから覚める」ということをパウロは教えています。これは、言い換えると、「地上のものに心を寄せない、天を見上げる」と言ってもいいかもしれ

れません。コロサイ書に、こう書いてあります。「コロ 3:2-4 上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

イエス様が、今の悪い時代から私たちをお救いになる時が近づいています。天から戻って来られて、私たちを引き上げ、栄光の姿に変えてくださいます。そして、この地上には神の怒りが降ります。地上にある罪や不正に対する神の怒りです。私たちは、恵みによってこの救いにあずかることを、すでにローマ書で約束されていました。「5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」そして、神の救いの時を待ち望みなさいということです。

ですから、私たちはこの地上に置いて、社会生活でしっかりと証しを立てますが、身軽でないといけないということですね。先週の平日の学びのダニエル書で、高山右近のことを話しました。秀吉に仕えたキリシタン大名です。彼は最も忠実な家臣の一人でした。有能でした。そして多くの教会を建てることに尽力しました。ところが、秀吉がキリシタンに対する迫害を加え、伴天連追放令を出します。そこで、高山右近はあっさりと、自分の信仰を優先し、自分の財産と領土を返上を申し出ます。このこだわりのなさが、すごいです。天の御国に対する幻があまりにも強烈でしっかりとしていたため、この世のものに執着がなかったのです。

今、そのような時期に近づいているから、誘惑やつまずきが多くなっている。試練も多くなっている。しっかりと目を覚まして祈っていなさいとパウロは教えます。ペテロが、眠っていたために、イエス様を捕らえに来た者たちに対して正しく対応できず、ついに主ご自身を否定するような罪を犯しましたが、知らないうちに肉に囚われ、罪の中にあるようになってしまいます。それが眠っている、ということです。サタンは、いろいろな形で、私たちに惑わしを与えます。この地上の事柄に絡んでくるように誘ってきます。そして、この世のことに教会を関わらせ、まるで教会がこの世を良くしていくものであるかのように惑わします。当時のユダヤ人指導者たちが、納税することが律法にかなったことなのかどうなのか、と、議論させていること自体、もうこの世に絡められてしまったのです。神の御国から世に目を逸らされているのです。

¹² 夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。

これが、聖書における世界の流れの姿です。第一に、「夜は深まり」ということです。世がますます暗くなっていく、ということです。悪も積み上げられ、不正がはびこるということです。イエス様は、こう言われました。「マタ 24:10-12 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。」

11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。」けれども、第二に、それは「**昼は近づいて来ました**」という徴でもあるのです。夜が深まればそれだけ、夜明けが近いですね。主が戻って来られる時が近づいているということです。ペテロは、第二の手紙でこう言いました。「1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」明けの明星として、イエス様のことを語っています。夜が明けると近く、そして夜が明けたら、そこには太陽なるキリストが輝いておられます。キリストを王とする神の国の到来です。

私たちが気落ちした時は、この望みをもって待ち望みましょう。再びキリシタンの話をしますと、江戸時代、キリスト教が禁令となり、各地に徹底的な弾圧がありました。山形で、雪が積もっている中で、ある女の子の両親が、その信仰のゆえに首打ちの刑に処せられました。その子は、「**パライソ**」と言いながら、両親が処刑されたところまで連れて行かれます。そこには、まだ雪の上に、血の跡があります。その子は、藁でできた長靴を脱いで、聖なる地であることを示しました。そして、彼女は満面の笑みを浮かべます。首が切られる時に近づくにつれて、喜ぶのです。なぜか？天の栄光に入る瞬間が近づいているからです。夜が深まれば、それだけ昼が近づいています。

そして、「**闇のわさを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか**」と教えています。当時、ローマ社会では、ローマ兵の姿は日常の姿でした。武具を身に着けるという言葉は、よく理解できたでしょう。私たちが、戦いの中にある、霊の戦いの中にあるということを知り、しっかり防御することが必要です。

まずしなければいけないのは、闇のわさを捨てることです。ローマ社会では、当たり前になっていたことがあります。今の社会でも当たり前になっているかもしれません。エペソ人への手紙 5 章ですが、長くなりますが、3 節から 12 節まで読みます。「3 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、淫らな行いも、どんな汚れも、また貪りも、口にすることさえしてはいけません。4 また、わいせつなことや、愚かなおしゃべり、下品な冗談もそうです。これらは、ふさわしくありません。むしろ、口にすべきは感謝のことばです。5 このことをよく知っておきなさい。淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません。6 だれにも空しいことばでだまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです。7 ですから、彼らの仲間になってはいけません。8 あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。9 あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。10 何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。11 実を結ばない闇のわざに加わらず、むしろ、それを明るみに出しなさい。12 彼らがひそかに行っていることは、口にすることも恥ずかしいことなのです。」当時のギリシア・ローマ社会にあった、ここで闇のわざと言われているものの、具体的なことを少し読んだり、実際のトルコとギリシアの遺跡

の前で聞きましたが、本当に口に出すのはばまれるような、忌まわしいことです。それらが、当たり前に行われていました。

そして、「光の武具」を身に着けるのですが、今、読んだところには「あらゆる善意と正義と真実」というのが、光としての実であることを書いていますね。テサロニケ第一の手紙では、こう書いてあります。「I テサ 5:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みというかぶとをかぶり、身を慎んでいきましょう。」信仰と愛、救いの望みという武具を身に付けます。

2B キリストを身に着ける 13-14

¹³ 遊興や泥酔、淫乱や好色、争いやねたみの生活ではなく、昼らしい、品位のある生き方をしようではありませんか。

遊興や泥酔は、不節制に関することです。そして淫乱や好色は、性的不道徳です。それから、争いやねたみは、高慢や敵意に関わることです。これらのものを打ち捨てなさい、そして昼間らしい、正しい生き方をしなさいということです。主を待ち望むことは、正しい生活へと導かれます。

¹⁴ 主イエス・キリストを着なさい。欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。

再び、身に着けることをパウロは話しています。「主イエス・キリスト」を身にまといます。この方に一点集中です。この方に倣っていきます。この方の恵みと知識にあって成長することです。エペソ人への手紙では、次のように説明しています。「エペ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、²³ また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、²⁴ 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」

そして、最後に、「欲望を満たそうと、肉に心を用いてはいけません。」と言っていますね。社会の中で生きていく時に、欲望を満たす機会がいくらでもあります。しかし、国の権威については従い、敬う姿勢で。隣人に対しては愛し、善を行う姿勢で。そして、自分自身に対しては、肉の欲望を避けて、イエス様に集中する姿勢で生きていきます。